南相木村誌

歴史編 二 近世

第二節　峠と街道

一　南相木村の峠

村の外へ向う道

村絵図が描く範囲は、その村の地域に限定されていて、村外へのつながりはほとんどわからない。しかし南相木村の場合、相木川に沿って作られている村内の道は、相木川の流れに従って下流の村へとつながっている。

（南）相木川の支流、あるいは上流の三河川や栗尾川に沿った道も、更にその上流をたどると、村を包む山々の間を縫って村外につながっていることを示している。

当村をどのように位置づけるかは、視点によって変わる。例えば当村は、佐久郡北相木村・小海町・南牧村・川上村、そして上州（群馬県）多野郡上野村の中心にある、ということができる。嘉永四年（一八五一）九月の当村鎮守祭礼で芝居が演じられると、そこへ参集したのは村人は勿論のこと、久保・坂上・栃原（以上北相木）、小海・親沢・宿渡・落合（以上小海）、海尻・海の口・広瀬（南牧）、大深山・居倉・落合（川上）の人々であった（第八章　第二節参照）。これらの集落は、南相木周辺にあり、芝居見物を一つの事例として、人や物資が南相木と頻繁に交流していたことを示している。

上州甘楽郡の上野村については、同村内に残された近世の奉公人請状（奉公人が雇主に提出する契約書）によると、当村からのものがみられる。天明九年（寛政元年、一七八九）二月、当村十次郎は給金一両二分二朱で、上州白井の甚兵衛に一年季奉公を（右側 続き）契約している。同四年二月には南相木中嶋の孫四郎娘ゆきを、身代金一両二分と定め、これも白井の甚兵衛に一六年季の奉公に出している。これは天明の飢饉の影響が考えられ、食料に困ってのこととみられる。嘉永五年（一八五二）九月、当村四郎右衛門は「無換入用」があるとして、上州甘楽郡乙父村才重郎及び同郡本宿金左衛門から金三三両を借用し五か年の奉公を約束している（『上野村誌Ⅷ 上野村の歴史』）。白井は当村に隣接する楢原村の枝郷、その東隣が乙父村（ともに現上野村）で、当村との関わりが深かったことを示している。

南相木村周辺の峠

相木川沿いに下って小海に出る場合は別として、それ以外は峠を越えて村外に向う。 そのため南相木村の周囲には、多くの峠がみられる。

延享元年村絵図（下書）には「御巣鷹山」の横に「かちこへ」がみられる。また「大門御巣鷹山」も記入されている（史 VI-11）。

別の延享元年村絵図にも「かちこひ」と「たひもん」はあり、そのほかでは「廣瀬境」（史 VI-12）、「北相木境」「小海境」が記載されている。

幕末期の村絵図では「小海村境」と「武州境」が記され、道の先は山の中に消えていて、峠名はみられない。

明治七年の村絵図と峠

明治七年（一八七四）に作成されたと考えられる村絵図（山崎哲人氏確認）は、南相木村周辺の山々及び峠についての記載が多くなる。相木川の右岸、村の北側の山々（村境）を西から順にみると、

- 見張ノ城
- 倉掛山
- 大ヒレ峠
- 上ノ山城
- 赤ツラ山
- 御座山

がみられる。

相木川の左岸、村の南側の山々（村境）を西から追ってみると、

- 御座山
- 俵岩
- 鳥居峠城
- 栃山
- 大芝峠
- 弁賊天山
- 広瀬峠
- 石尊山
- 臨幸峠
- 雷ケ嶽
- 馬越峠
- 御墓山（御陵山）

となる。相木川左岸には、村境より内側になるが、

- 神殿山
- 藤塚
- 火トボシノ城
- 矢窪の城

が記載されている。

此処には六カ所の峠が認められるが（○印、図VI-1参照）、それらの峠は江戸時代から既に存在していたものであろう。また峠の名称も、明治以前から付けられていたものが多いと考えられる。

峠と名付けられた場所には、当然のことではあるが全て道（赤線）が通っている。しかし川や沢に沿って通っている道は、途中で消えているが（史VI-12）、その先えでは山を越える道が無かったとはいえない。峠というものは、山越えが必要と認められれば開かれるものであり、必要がなくなれば自然消滅する。またその場所が嶮峻であれば、設置した山道の維持・管理が困難で、結果的に放棄されたものもあったと考えられる。峠には、新旧さまざまで更に、栄枯盛衰があった。

二　南相木村から隣村への道

元禄国絵図にみる南相木村

元禄六年（一六九三）に改められたと記入された信濃国絵図（複写、中島大介家所蔵、付録図参照）がある。幕府が国絵図の改訂を命じたのは元禄一〇年とされているので（岩波『日本史年表』）、それに先立つことになる。

村内に残されているこの元禄六年信濃国絵図は、後年に模写されたものと考えられるので、その内容は元禄期に限定できない。しかし江戸中期の地域の実態は記録されているので、これによって南相木村とその周辺をみることとする。

当村からは四本の道が出ている。第一は大深山、第二は御所平、第三はヒロセ（広瀬）に出ている。これらは全て、海ノ口から秋山・梓山に通じる道の途中にあり、南相木が川上地域と関わりの深かったことを示している。

最後の一本は小海に出るが、ここへは北相木からの道も出てきている。小海から先は二本の道がみられる。一本は千曲川を渡って馬流に合し、千曲川の左岸（西側）を通る道と結んでいる。もう一本は東馬流から高岩・海瀬を通る千曲川右岸（東側）の道となる。

天保国絵図にみる南相木村

天保国絵図で南相木村をみると、三本の道が通っている。第一は南相木川の下流へ向かう道である。その先は小海町から、千曲川右岸に向かって極之口村・入沢村の内三条、更に上中込村・太田部村を経て、平賀新町村の先で佐久甲州街道の下中込村手前に出る。もっとも途中の樋之口村先の千曲川橋を渡れば下畑村に出られ、更にその下流の橋の向かうは高野町村であり、下越村先の千曲川を渡れば臼田村に至る。

第二は北相木村に出て、北相木川沿いに上流へ進めば、ぶどう（武道）峠あるいは栂峠を越えて上州（群馬県）甘楽郡楢原村（上野村の内）に至る。

第三は南相木川を上流に進み、大門峠を越えて大深山村を居倉村の間に出る道で、千曲川沿いに下れば原村・樋沢村を経て海口村に至る。また上流へ進めば、秋山村・梓山村・川端村へと続く。

NOTE: This document is for reference purpose only. Do not distribute.

NoobowSystems Lab. Tomioka, Japan 2026